

パネル

が仏祖を『道得する者』と呼ばずして単に道得と呼んだところに我々は深き興味を感じる。諸仏諸祖は菩提を表現せる人格である。しかるに彼は、人格なくしてあり得べからざるこの表現の中からその人格を抜き取って、ただ菩提の表現のみを独立せしめる。そうしてそれを道得と呼ぶ」と。

道元は確かに禅の「不立文字、教外別伝」という原理を批判し、言語は方便だけではなく、真の実在であると認めている。

「仏教」「道得」および『正法眼蔵随門記』などをもとに、言語での表現によつて修行者の方から実在を構成することを道元が提案していると解釈できると思われる。

「道得」は言語の宗教的な範囲を指し、宇宙論的な次元を含めている。哲学の立場から言えば、道元は言語の中に第二次言語を認めている。「道得」は一般の言語と違って、コンテクストとは離れないものであつて、翻訳できない言い方でもあり、言語の形があること・遂行的であることを指している。フーコーの歴史的な分析にしたがつて言えば、「道得」はルネサンスの主体のない言語に近づいていると言える。和辻の『沙門道元』を評価すれば、道元における言語の問題は、「道得」を中心にして、正法眼蔵の哲学を説明するための手がかりとなるのではないかと考える。

無常仏性を基盤とするヒューマニズム

——道元思想から現代哲学へ——

ゲレオン・コプフ

二十世紀の日本の思想家の第一人者である西田幾多郎（一八七〇—一九四五）は、後世自らの哲学的見解を明らかにする際によく仏教の伝統を引き合いに出した。実際のところ、彼における仏教經典の解釈と引用の仕方は、彼の思想の展開に興味深さを際立たせている。系統だった「不二不二」の理論としての西田哲学を編成しようとして試みている間、彼の経歴の全体にわたつて彼の哲学体系の礎となる基本概念の枠組みがしばしば変化を見せた。

つまり、一九一一年に公判された『善の研究』のなかで、西田は自らの哲学体系を「純粹經驗」の觀念に基づくものとしている。「純粹經驗」という觀念を原理的ににおける弱点として不満に思う点について、西田は一九一七年の「絶対意思」、一九二五年の「場所」、一九三三年の「一般的弁証法」のように、ヨハン・ゴットフリープ・フイヒテ、プラトール、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルなどの理想主義に同調した一連の専門用語で代替した。後期に、彼はそれらの代わりに、彼の独自の新語句である一九三七年の「行為的直観」、一九三九年の「絶対矛盾的自己同一」を不二二元論の基本的な原理として利用し始めた。一九三九年以降、彼はしばしば不二

元論の解説やひいては最終的な二つのパラダイムで、一九三九年発表の「平常底」と一九四五年の「逆対応」の解析においてさえも仏教用語、仏教教義に頼るようになった。西田独自の用語は他の哲学よりもむしろ仏教哲学のほうで、より近いことを暗示するように思えるのである。

道元の「心身脱落」と西田の「一と多の絶対矛盾的自己同一」として考えられた「矛盾的自己同一」とはかなり違っていることは言うまでもないが、「心身脱落」が迷いと悟りの二元論を脱構築するものであるように、「矛盾的自己同一」も一と多の二元論を脱構築するものであると言ってよい。

一は世界平和を、多は各国の独立個人の公正を概念に表す。世界平和を達したり、各々の人間の独立が認めたりするとき、一即多という概念を具体化させていったと言つてよい。同様に、一即多の哲学は世界平和でありながら他方、人間の独立が認める状態への図式にもなる。なぜなら、人間の神髄は一般的な人間性と各々の個性性を含んでいる。

もちろん、道元の救済論とその動機は西田や務台とは全く違うものである。しかし、務台は人類ヒューマニズムの概念を提示し、道元はその世界人間の坐禅によつて、可能性を示していると言えり。

中国語圏における道元の発見

何 燕 生

道元はかつて中国に留学し、中国の仏教と深いかかわりを持っているが、中国ではその存在が殆ど知られていない。しかし、近年、そのような状況に一つの変化が見られるようになってきた。それは、台湾を中心とする中国語圏で道元の書物を読んだり、道元の強調するところの「只管打坐」を標榜し、それを実践の中に組み組んだりするような試みが一部のグループによつて行われていること、また、台湾および大陸の学界で中国語で書かれた道元研究関連の書物や論文が次第に見られるようになってきたということである。これまで調べてきたところによると、前者は実践レベルから道元の坐禅観を取り入れようとしているのに対して、後者の場合は思想レベルから道元の禅思想を発見しようという特徴を持っているように思われる。欧米において、道元の思想に共鳴して、坐禅を行っている団体や個人が多いが、管見によると、中国語圏ではそのような例がこれまでに未だ確認されていない。

実践レベルからの道元の発見とは、台湾出身の洪文亮医師を導師とする一連の活動を指す。道元を「発見」したのは、氏が日本を訪問したとき、日本曹洞宗の原田雪溪氏との出会いがきっかけだったという。原田氏の印可を受けると共に、曹洞宗の門徒という立場に立ち、道元の『正法眼蔵』を研究したり、道